

【大学等・一般の部】優秀賞

## 私の人生を色とりどりにしてくれるもの



大分市 朝木 孝枝

「一番苦手なことができたなら、自分に自信が持てるかもしれない、よし、ホノルルマラソンを走ろう。」それがきっかけだった。1キロ走っただけで立ち止まる私を見て、両親すら「何を夢みたいなことを」と笑っていた。あれから22年。まだ走っている。今年55歳を迎え、当然スピードも落ち、距離も少し落ちてきたし、外反母趾が悲鳴を上げることもある。でも、走りたい。なぜなら、走ることは、私の人生にいろいろな色をつけてくれたからだ。

走り始めたときは中学校勤務だったため、陸上部と走っていた。子どもたちときつさを共有し、練習が終わると輝く笑顔に会えた。30代で走り始めたから、体があっちこちで不具合をおこす。ランニング技術、栄養学、スポーツ外傷など多くのことを学ぶことが欠かせず、それが養護教諭としての知識となった。走り始めた当初は、10キロ走ると倒れこんでいたため、フルマラソンを走るなんて信じられないと思っていた。しかし、ランニング雑誌を読むと、様々な大会があることを知った。ハーフマラソン、ウルトラマラソン、トレイルラン、駅伝、富士一気登山競走…。「100キロ走るなんて考えられない、富士山を4時間半で走って登るなんて、おかしくない？」なんて思っていたのに、それにチャレンジしようとしている自分がいた。「人間やってやれないことは、ある。でも、やらずにできるはずは、ない。」とりあえずチャレンジしてみようと考え、100キロマラソンも富士一気登山競走も走った。そこには、幼い頃、徒競走でドベになり落ち込む私に母がかけた言葉があったのだと思う。「ドベがおるけん、一番がおるんで。」…。「そうだ、私がいなければ一番の子もいなかったんだ。」それ以来、できなくてもチャレンジしようという気持ちは芽生えたのだと思う。どんなことも、華々しい結果は出なくても、成果は必ずあると思う。今、子どもとふれあうとき、平均と較べたり、数値、成績だけで評価したりして、子どものやる気をなくすことだけはしたくない。短距離は苦手でも、長距離なら走れるという22年の私の経験から確信をしている。

マラソン大会に行くたびいろいろな出会いがあった。一番は、両親の愛との出会い直しかもしれない。私が参加するマラソン大会に、旅行がてら両親が応援に来ていた。どんなに大人数でもゴールで私を見つけ出し拍手を送る母。カメラを抱えても私のゴールの時は、全く違う方向を向いていて悔しがる父。両親の愛と出会い直しささせてくれたのが走ることだったと思う。そんな両親ももういない。今でも走っていると、道ばたに「がんばれ」という両親の姿が浮かぶことがある。両親が亡くなった後、もう、独りで行くしかないのかなと思っていた私のマラソンに養護教諭だった仲間たちがついてきてくれている。私よりコースを調べ、タイムにあわせて、いろいろな場所に現れて、全身で手を振り、応援してくれる。そしてゴールで私の大好きな「おかえり」という言葉で迎えてくれる。「おかえり」は、生きていた母が最後にはっきり私に言った言葉だ。この仲間たちのあたたかさを伝えたいという思いからも、巣立った子どもがひとりぼっちだと感じたときに、朝木保健室で「おかえり」と迎えたいと思うようになった。素敵な仲間たちとのかかわりも、私の人生のたくさんの色たちである。

走ってきたからこそ、私の人生には多くの色が輝いている。両親の愛、教え子の汗や涙、仲間とのかかわり、自分の可能性、さまざまな知識、目の前にいる子どもたちに対するときの思い…。これからも、走りたい。そして、もっと多くの色で私の人生を輝かせたいと思う。